

## 〈アーティスト・イン・レジデンス〉事業について

安原雅之(愛知県立芸術大学准教授)

---

平成 19 年度における独立法人化に伴い、愛知県立芸術大学に「芸術創造センター」が設立され、この新組織は地域連携・地域貢献や国際交流の促進など、さまざまな対外活動を担うこととなった。本稿では、当センターが本年度に立ち上げた事業のひとつである〈アーティスト・イン・レジデンス〉について報告したい。

〈アーティスト・イン・レジデンス〉とは、「芸術家の滞在型の創作活動」を意味するもので、近年では日本においても美術館や美術系大学等で実施されている。海外の大学では、音楽家による〈アーティスト・イン・レジデンス〉も珍しくないが、日本の音楽大学においてはその概念すら知られていないのが実情ではないだろうか。愛知県立芸術大学では、教育活動の拡充、地域貢献、国際交流の促進など、大学が掲げるいくつもの目標を盛り込み、プログラムを組んだ。初年度となる平成 19 年度の招聘アーティストは、下記の音楽家 3 名と

1. アラン・ジョンストン(アーティスト、エジンバラ美術大学教授)
2. 吉田恵(オルガニスト、愛知県立芸術大学非常勤講師)
3. マリア・デ・フランチェスカ=カヴァッツァ(声楽家、ミュンヘン音楽大学教授)
4. 藤井隆也(アーティスト、NPO 法人 galerie weissraum, kyoto, Japan 代表)
5. イェルク=ヴォルフガング・ヤーン(ヴァイオリニスト、元カールスルーエ国立音楽大学教授)

本学の〈アーティスト・イン・レジデンス〉では、(1) アーティスト・トーク、(2) ワークショップ、(3) 成果の発表 [コンサートあるいは展覧会]、の 3 つを核としてプログラムが組まれている。2008 年 3 月現在既に終了した企画について、まず音楽関係の 2 つの企画、次に美術関係の 2 企画について報告したい。

## 吉田恵 2007年12月14日(金)～12月25日(火)

- (1) アーティスト・トーク「J.S. バッハとの出会い」&コンサート 12月16日
- (2) ワークショップ
  - オルガンの歴史 12月18日(火)
  - オルガンのしくみ 12月19日(水)
  - オルガン公開レッスン 12月21日(金)
- (3) ミュージック・シンポジア～クリスマス・コンサート 12月24日

吉田恵先生には、本学の非常勤講師として10年来にわたってオルガン実技の指導をしていただいたが、本年度が最後になるにあたり、普段の授業(レッスン)では不可能ないろいろな内容を盛り込んだ。

まず、アーティスト・トークでは、「バッハ全曲演奏のコンサート・シリーズ」を続行中の吉田先生に、「バッハとの出会い」をタイトルにお話をいただき、後半はコンサート。一般に公開されることの少ない本学のオルガンで、今日の日本におけるバッハ演奏の第一人者による演奏が聴けたことの意義は大きい。

また、ワークショップでは、オルガンの歴史や構造について詳しく説明された。さらに今回は、オルガン制作者の木村秀樹氏をゲストに迎え、木村氏が制作した小型のポジティブ・オルガンを実際に分解し、内部の構造を詳しく見せていただくという貴重な体験ができた。

そして、滞在の最後には、クリスマス・コンサートが行われ、本学教員と学生、長久手フォレスト合奏団との共演が実現した。コンサートのあとは、奏楽堂のロビーにて、暖かいチャイやお菓子が振る舞われ、ささやかなパーティーが開かれた。そして、暗くなった屋外には、終演に合わせてイルミネーションが地面に散りばめられ、家路につく聴衆を楽しませてくれた。



パーティーの様子  
12月24日、愛知県立芸術大学奏楽堂  
ホワイエにて

## アーティスト・トーク&コンサート（12月16日）プログラム

「J. S. バッハとの出会い」 トーク：吉田恵

コンサート

J.S. バッハ（1675-1750）

パストラーレ ヘ長調 BWV590

シュープラー・コラール集（BWV645-650）

フーガ ト短調 BWV578

いと高きところには神にのみ栄光あれ BWV662

前奏曲とフーガ ホ短調 BWV548

オルガン：吉田恵／共演：中巻寛子（アルト独唱・本学准教授）

## ミュージック・シンポジア『クリスマス・コンサート』（12月24日）プログラム

D. ブクステフーデ（ca.1637-1707）

前奏曲，フーガとシャコンヌ BuxWV137

神は世をかくのごとく愛したもう BuxWV5（Sop—ソロカンタータ）

暁の星のいと美しきかな BuxWV223

[グレゴリオ聖歌—テ デウム]

テ デウム

A. L. ヴィヴァルディ（1678-1741）

ヴァイオリンとオルガンのための協奏曲 二短調 RV541

G. H. ヘンデル（1685-1759）

オルガン協奏曲変ロ長調 作品4 第2番

オルガン：吉田恵

共演：福本泰之（ヴァイオリン独奏・愛知芸大准教授）、長久手フォレスト合奏団、他



ミュージック・シンポジア『クリスマス・コンサート』

12月24日、愛知県立芸術大学奏楽堂にて

## マリア・デ・フランチェスカ＝カヴァッツァ 2008年1月8日(水)～1月17日(水)

(1) アーティスト・トーク

(2) ワークショップ

公開レッスン Vol.1:〈オペラ・アンサンブル〉 1月10日(水) 大合奏室

公開レッスン Vol.2:〈オペラ・アンサンブルと歌曲〉 1月15日(火) 大合奏室

(3) ミュージック・シンポジア『カヴァッツァ先生とその仲間たち』 1月17日

於：宗次ホール(名古屋市・栄)

(4) カヴァッツァ先生の講演 & ミニコンサート in 愛知県立大学講演

—愛知県立大学と愛知県立芸術大学の交流会—

本学声楽科の天下久見子教授のご友人でもある声楽家のマリア・デ・フランチェスカ＝カヴァッツァ先生は、二人の弟子さん、エミーリオ・ボンズさんとアレハンドロ・アルメンタさんと共に来てくださった。そして、充実したレッスンとコンサートの他、愛知県立大学との交流会も行われるなど、短い滞在期間中に密度の濃い交流が展開された。同世代の外国人学生と一緒に学び、共演できたことは、参加した本学の学生たちにとっても、非常に刺激的で有意義な経験となったに違いない。その成果は、最後に行われた宗次ホールにて開催されたコンサートでも十分に感じられた。カヴァッツァ先生と天下先生の、学生に対する暖かい眼差しと、芸術に対する愛と情熱が、深く印象に残った。また、天下先生には、この企画全般に渡って大変なご尽力をいただいた。心から感謝申し上げる。



レッスン風景(左) / 交流会の様子 愛知県立大学にて(右)

ミュージック・シンポジア『カヴァッツァ先生とその仲間たち』（1月17日）  
プログラム

はじめに

カヴァッツァ先生のお話

トーク：マリア・デ・フランチェスカ=カヴァッツァ

第1部 W.A. モーツァルト：オペラ《ドン・ジョヴァンニ》ハイライト

第1幕より

第2曲：レチタティーヴォと二重唱（ドンナ・アンナとドン・オッターヴィオ）

「ああ、何といういたましい光景が～行って、無慈悲な人」

後藤静香/エミーリオ・ボンズ

第7曲：レチタティーヴォと二重唱（ドン・ジョヴァンニとツェルリーナ）

「ツェルリーナよ、やっと解放されたな～手を取り合って」

アレハンドロ・アルメンタ/宮崎有希子

第2幕より

第14曲：二重唱（ドン・ジョヴァンニとレポレッコ）

「おい、おどけ者」

アレハンドロ・アルメンタ/飯田源太

第15曲：三重唱（ドンナ・エルヴィーラとドン・ジョヴァンニとレポレッコ）

「ああ、おだまり悪い心よ」

森本里沙/夏目悠治/飯田源太

第16曲：カンツォネッタ（ドン・ジョヴァンニ）

「おいで窓辺に」

アレハンドロ・アルメンタ

第21曲：アリア（ドン・オッターヴィオ）

「恋人を慰めて」

エミーリオ・ボンズ

第2部 G. ブッチーニ：オペラ《ラ・ボエーム》ハイライト

第3幕より 「寒いから、中へ」

第4幕より 「ミミ、君はもう戻ってこない」

岩川亮子/エミーリオ・ボンズ/アレハンドロ・アルメンタ/後藤静香

第3部 ドイツ歌曲・日本歌曲

シューベルト：歌曲集《冬の旅》より

夏目悠治

シューマン：歌曲集《ミルテの花》より

西畑佳澄

マーラー：《さすらう若人の歌》より

遠山貴之

平井康三郎：平城山

アレハンドロ・アルメンタ

滝廉太郎：荒城の月

エミーリオ・ボンズ



ピアノ：山本敦子

司会・通訳 大下久見子

コンサートのあとで（宗次ホールにて）

## アラン・ジョンストン 2007年12月5日(水)～12月23日(日)

(1) アーティスト・トーク：オープニング・シンポジウム

パネラー：アラン・ジョンストン、藤井隆也、安原雅之 司会：小林英樹

(2) ワークショップ・アトリエ訪問

(3) アラン・ジョンストン展 —「空間」の開示—

12月17日(月)～12月24日(月) 愛知県立芸術大学 芸術資料館

エジンバラ美術大学の教授であるアラン・ジョンストン先生は、非常にエネルギッシュな方である。今回の滞在中にも、精力的な制作を行う傍ら、数多くの学生や教員と交流し、また、本学とエジンバラ美術大学の将来的な交流のために、さまざまな提案を下された。

滞在中に制作したウォール・ドローイングの作品は、今もひっそりと佇んでいる。

アラン・ジョンストン展—「空間」の開示—  
オープニング・レセプション(右)と、  
展示風景(下)。愛知県立大学芸術資料館にて。  
収斂された作品が、空間に張りつめた緊張  
感をもたらしていた。



## 藤井隆也 2008年1月28日(月)～2月8日(金)

(1) アーティスト・トーク：2008年2月4日(月)

会場：愛知県立芸術大学 芸術資料館演習室

(2) ワークショップ：「盛り塩」のワークショップを行う

(3) 展覧会

2月8日(金)～21日(木)／愛知県立芸術大学 学食2Fギャラリー

2月8日(金)～14日(木)／Art Gallery 直指天

京都でNPO法人galerie weissraumを主宰する藤井隆也氏は、10月に本学芸術資料館で開催されたデュッセルドルフ美術大学との交流展にの際に開催されたシンポジウムにも参加されており、今年度2度目の来学となった。短い期間ではあったが、ワークショップで学生も制作に関わることができ、2つの会場で展覧会が開催された。



展示風景／愛知県立芸術大学 学食2Fギャラリー

2008年3月現在、5名の招聘アーティストのうち、4名の活動が終了している。いずれの場合も、アーティストとの親密な交流ができたことは大きな収穫であった。しかしまた、この〈アーティスト・イン・レジデンス〉事業には、課題が山積みであることも明らかとなった。予想をはるかに上回った事務的な仕事、将来的な予算の確保、広報など、どれも重要かつ深刻な問題ではあるが、今後それらに立ち向かっていくだけのエネルギーと自信を、この事業から得ることができたのも事実である。今後もこの事業を継続できることを、切に望む。